

Ⅱ 植生概観

大隅半島は海岸砂丘や断崖植生からの山頂のコメツツジ群落まで気候・地形に応じて様々な植生が住み分けている。さらに人為的影響により自然植生の変化がみられる。

1. 山地帯

大隅半島でもっとも海拔高度の高い大篭柄岳（1,237m）付近にシラキブナ林が一部残存している。海拔1,100m前後から1,220m前後までブナ林が、さらに尾根部では風衝のためスズタケ草原が広がっている。山頂部には10cmの背丈のコメツツジ草原がみられる。

御岳（1,182m）では山頂付近1,150mまではミズナラが樹高5mと矮生しコバノガマズミ、オンツツジなどと生育している。御岳山では海拔900～1,020m付近にアカガシ、ツクシイヌツゲ、ヤブツバキが優占したベニドウダンシーキミ群落が5～6mの低木林を構成している。御岳山付近では900～1,020m付近にベニドウダンシーキミ群落が生育しているが、大篭柄岳、横岳付近あるいは稲尾岳では900～1,150mにはモミ林が生育している。

高隈山は肝属山地に比較し、現在では伐採跡がそれほど広がらない。大篭柄岳や御岳に伐採跡がみられる。ナガバノモミジイチゴやバライチゴなどの伐跡群落が拡がってみられる。

大隅半島北部の高隈山地や南部の国見山、稲尾岳、荒西山、木場岳などの肝属山地の海拔300～900m付近までの斜面にウラジロガシが優占するイスノキウラジロガシ林が発達している（Photo. 4）。海拔20～300m付近まではコジイやスタジイが優占した植分が点在している。最近の林業経営の一環による伐跡地はウラジロガシ林、スタジイやコジイ林周辺に広く拡がっている。

大隅半島北部の低木帯はスギ、ヒノキの植林がきわめて広くみられる。ところどころマテバシイの二次林が斜面をおおいタブ林のような景観を与えている。

志布志湾沖に自然林でつまれた枇榔島が位置している。枇榔島はその名のごとくビロウが高木層に高被度でおおっており、亜高木層のモクタチバナ、スタジイなどの常緑広葉樹が枇榔島の風衝の強さと立地の安定を示している（Photo. 5）。

2. 台 地

大隅半島北部のそお丘陵はシラス台地から構成されている。台地上は大部分が耕作され野井倉、蓬原以外は畑地、果樹園、茶畑、苗圃に利用されている。シラス台地上の一部野井倉や蓬原はかんがいにより水田耕作が行なわれている。台地を流れる安楽川、菱田川、田原川、串良川、肝属川は志布志湾へ、高須川、神ノ川、松崎川は鹿児島湾に注ぎこみシラス台地を削り深い谷部をつくっている。谷部斜面には、スギ、ヒノキが下部に、上部あるいは乾燥地にクロマツ植林が帯状に台地の割れ目を走っている（Photo. 6）。このような植林は集落の集辺にもみられ、とくに志布志湾岸などではシラス台地上の集落に境界林としてスギが多く利用されている。このように台地部などの人間の生活域では居住域の裏山だけあるいは周辺にだけは最低限の緑が残されている（Photo. 7）。山地部の木材生産工場化や木材切りだしのための開発は、人間の居住域から一歩離れたところで行なわれている（Photo. 8）。

3. 平 地

肝属川周辺には広大な沖積低地が大隅半島の中央部を横切っている。沖積低地は全て水田耕作に利用され、鹿児島県では比較的広い穀倉地帯を形成している。沖積低地や砂丘の後背湿地はその大部分が開発されつくしているが、1ヶ所志布志に湿地帯のまま残され、シログワイ群落やホテイアオイ群落が広がっている。

4. 海 岸

大隅半島の海岸部は距離的にも長くまた海岸線の地形は砂丘地帯から断崖地まで変化に富んでいるため、様々な植分が地形に適して生育している。志布志湾沿いの砂丘地帯にはコウボウムギやハマヒルガオのように移動する砂地をおさえる働きをする砂丘植生が帯状に細くおっている。古砂丘地帯は古くからのクロマツ植林が海岸線に連なっている。砂丘最前線に植栽されたクロマツは飛砂のため埋もれて半分枯れかかっているのがみられる。内之浦、岸良、船間、大浦、浜尻の海岸風衝地の土壌堆積地はオニヤブソテツ―ハマビワ群集による低木林が、凸

出した断崖地にはウバメガシ林が、さらに乾燥した土壌堆積のない岩場にはノジグーハチジョウススキ群落が生育している。佐多岬では奄美大島や沖縄本島に共通するソテツ群落が荒い海岸断崖風衝地に生育している。

伊座敷湾や根占町の指宿カルデラあとの断崖地にはハマビワ群落が風衝とつりあって生育している。崖錐地にはマテバシイ二次林が生育している。これは断崖地の風化土壌が常にたまるため立地が不安定でマテバシイ二次林が生育しているものと考えられる。